

我國に明かに銘を打つたイソップの譬喩談の傳へられたのは、かく文祿の昔である。こゝに示されたトルコ語の「〔賢き〕ヨシパスの善き美しくしき〔本〕」の譯述されたのは何時であらうか。此の問題は最後に最も重要な問題として残される。併しながら之については、著者は本書に於て一言も説き及んで居らぬから、勿論其の意のある所は知り難い。たゞ既に述べやうに、之を吐魯番即ち高昌のウイグル人の間に行はれたものと見ることは、其の前序によりて明かである。高昌のウイグル人よりも以前に、此の附近の地方に於ける或るトルコ族で摩尼教を奉じたものがあつたらうとは推察するが、しかし發見の場所から考へ、ウイグル人と摩尼教との關係から考へ、また同じ地方から出た文書の斷片に、前に記した如く「吾等がウイグルの方へ來りし時」といふ文字の表はれて居ることなどから考へて見て、恐らくかく見るのは當を得たものであらう。ウイグル人の漠北を去つて高昌に移つたのは、西紀八六八年以來の事であるから、著者の言を敷衍すれば、無論此の以後のものとする譯である。自分には之に對して云爲すべき考は無い。せめて斷片の寫眞でも出て居れば、文字の上からの推察でも或は試みられやうが、それも出來ぬ。僅少なる用語の上から考へると、遅くも唐の中葉に當るものと斷ずるを憚らぬトルコ語||特にトルコ語と稱してウイグル語の名稱を避ける||の佛典に見ゆるものと同じ語法が現はれ、單語についても特異のものは無い。要するに唐宋時代のものといふより外致し方あるまい。かゝる漠然たる區別は言語の變遷上甚だ心元ないと考へる人もあらうが、口語の變化は兎も角もとして、文語に於る變遷の上から見れば、かゝる言葉も許容されねばならぬ次第である。